

# 「拝啓 蓮如上人様 — 御文章への返信」

杵 築 宏 典

拝啓、蓮如上人様。貴方様が亡くなられてから五百年という月日が経とうとしておりますが、お浄土に参らるから如何お過ごしでありましょうか。娑婆におられる時と同様、日々お念仏を申しておられることご推察申し上げますが、常住の極楽浄土でさぞ手持ち無沙汰ではありませんでしょうか。往相回向と共に還相回向を説いておられた親鸞聖人と違い、往相回向のみを強調された上人様におかれましては、さぞ常住のお浄土で時間を持て余しておられるのでは、お節介にもいろいろご心配を申し上げるところであります。

さて小生、浄土真宗本願寺派の一介の僧侶として、時々お参りの際に貴方様のお手紙を拝読させていただきましたお、お世話になっておりますこと感謝いたしますと共に、少しばかり感じますところを申し述べさせていただきます。く思い、この度筆をとらせていただきました。

ところで貴方様はその在正中、いろいろな事をなされ、

そのご功績や教化態度についてはいまさら申すまでもありませんが、私たちは得度習礼においては以下のように教えられております。

まず貴方様の教化態度は、

- ① 宗祖の同朋精神の継承（庶民的教化態度）
- ② 覚如上人の本願寺中心主義の継承
- ③ 時代即応の教化

（以上、『得度習礼ノート』）  
 ということなのだそうです。①の宗祖の同朋精神と②の差別を助長するような本願寺中心主義がどうして両立しうるのか甚だ疑問ではありますが、これも③にある時代即応の教化ということなのでしょう。時代や状況が変化すればそれに応じて教化する内容も変化していく、まさに真俗二諦の教学の源とも言えるものがここに見えることでもあります。また具体的なご功績としては、

- ① 『正信偈和讃』の刊行

② 『正信偈和讃』の朝暮勤行依用

③ 『御文章』による伝道

④ 山科本願寺の建立

(右、同上)

という、以上の四点が挙げられるというのです。貴方様のご功績について、後の者がとやかく言うことは失礼かもしれませんが、こういうことがご功績として挙げられるのであれば、そうしなかつたそれまでの法主様方こそ批判されねばならないのでありましようが、『正信偈和讃』の刊行や朝夕の勤行依用という程度のこと、貴方様のご功績ということで挙げられるならば、それは少し寂しい感じもするのですが……

さてこのご功績の中、特に『御文章』による伝道ということについては、私たち僧侶が普段から大変お世話になっておりますので、拝読しながら感じましたところを、少し申し述べさせていただけたく思います。

「聖人一流のご勸化のおもむきは、信心をもて本とせられ候。そのゆえはもろもろの雑行をなげすてて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたより往生は治定せしめたまう……」

この御文は、貴方様の書かれた「聖人一流章」というお手紙です。この章は数あるお手紙の中でも特に有名でして、得度習礼の課題にあるだけでなく、浄土真宗の聖典と言われるものの殆ど全てに記載されています。ですから浄土真宗にご縁のある者にとって、まず貴方様のお手紙といえばこの「聖人一流章」と言っても言い過ぎではない程によく知られているのです。如何でしょうか、在世中に出されたお手紙とは言え、後世にこれだけ広まって知られている事に少し驚きもし、嬉しさを感じておられるのでしょうか。

ところがですね、この有名なお手紙についてその意味がどれほど理解され、吟味されて拝読されているか、またそれがどう拝聴されているかという内容については、はっきり申しまして未だ貴方様のご意趣に背いて充分とは言えないだろうと思います。特にこのお手紙の冒頭にある「聖人」という語が誰を指しているかということ、以前私は友人と口論をしたことがあります。

友人いわく「『聖人』と書いてあるから親鸞聖人以外に考えられない。蓮如上人こそ宗祖親鸞様の教えを忠実に守り教化された方だ。この御文章によって難解な教義が民衆に広まったのだ」と。

確かにこの「聖人」という語については、浄土真宗の開

祖「親鸞聖人」と理解することが常識でありましょう。貴方様も、開祖親鸞聖人のことを指して書いておられるのでしようから、ここでいう「聖人」とは正しく親鸞聖人その人のことだと思えます。その意味で私の友人が言いました「聖人とは宗祖親鸞聖人のこと」という理解は決して誤りとは言えません。むしろ貴方様のお手紙を正しく理解されたと申してよろしいのではないでしょうか。しかしながら、いくら貴方様自身がその意図を以て書きしるされ、また文章の表現上親鸞聖人の事を指しておられたとしてもですよ、このお手紙の中に見えます「信心」や「念仏」等についての理解は、残念なことに親鸞聖人の理解とは少し違っているように思います。「少し」というのは謙遜であって、「全く」といっても良いのかも（しれません）そうです、お節介を承知で申し上げるならば、ここでおっしゃっておられる「聖人」とは、「親鸞聖人」ではなく「覚如上人」のお間違えではないのでしょうか。貴方様は、確かにお弟子さんや一般民衆にお手紙を書かれてはお念仏の教えを普及させました。また各地に本願寺を建立しては、真宗王国とも言える地盤を築いてゆかれました。そのエネルギー・行動力には、私も含めて浄土真宗にご縁のあった人々は皆敬服しているところであります。その貴方様の行動の根底にあったもの、

動かす原動力になったものこそ、本願寺を再建するという大志でありましょうし、宗祖親鸞聖人の教えを人々に伝道するという偉大な理想であったことでしょう。そのこと自体私のような一介の僧侶が貴方様のような立派なお方に云々言う資格はないかもしれませんが、友人のいう「宗祖親鸞様の教えを正しく教化された方」である貴方様への思い入れが間違いであるなどと言うつもりもありません。むしろそういう考えを持たれている方の方が、貴方様の意図を十分に汲んでいる（悪くいえば心身共に洗脳されている）と言えるのかもしれませんが。

しかしです、ここでご忠告申し上げたいのは、貴方様が理想と掲げた宗祖親鸞聖人の教えとは何であったのでしょうか、またそれに忠実に生きようとした貴方様の考えられる宗祖像とは如何なるものであったのでしょうか。総合的に見た場合に、貴方様の描いた宗祖像や思想は、宗祖ご自身の生き様や教義と比較・照合して正しいものと言えるのでしょうか。またそれは本当に貴方様ご自身が深く追求しながら導かれた結論としての宗祖像なのでしょうか。残念ながらそういうことが充分検証されておられませんのに、貴方様と宗祖親鸞聖人との信心理解は同じであるとか、親鸞聖人の教えを忠実に生きた人が貴方様であるなどといった、貴方様による宗祖教義の理解の

仕方だけを無批判に肯定してしまうような教団教学の姿勢、さらに宗祖の人物像を貴方様の眼を通してのみ全面的に肯定するような姿勢に対しては、たとえ一介の僧侶であり、何の功績がなくとも、親鸞聖人を開祖とし、その思想に少しでも忠実に生きていこうと願ひ、苦闘する私たちにとっては到底容認できないものがあります。

では、貴方様は宗祖親鸞を、その人格や教義・思想も含めて、どう理解しておられたのでしょうか。お節介にも、以下貴方様の批判をさせていただく前段階として、先に「聖人」とは覚如上人のことだと申しました、その覚如上人による宗祖理解を基にして、貴方様の宗祖理解を検証し、いつも手紙を拝読させられてばかりおりますので、この度は貴方様に返信のお手紙を出してみたいと思う事です。気が障り、読みづらい点もあるかとは思いますが、何分末学の者が申す苦言としてご了承いただけましたら幸いです。

### 一、三代伝持の血脈

本願寺教団第三代の法主である覚如上人が、親鸞聖人の墓所を本願寺として寺院化することに尽力され、その留守職であった役職を正式に法主として権威づけること

に努力奮闘されたことは、第八代の法主である貴方様なら当然もうご承知のことでありましょう。その点覚如上人については、本願寺の基礎を作られた人物として、本願寺教団においては、貴方様に先だってその功績をさまざまに評価してまいりました。しかしながら、ここで私が問題としたのは、覚如上人が現在に至る本願寺の基礎を作ったという、その結果そのものではありません。むしろ覚如上人による、寺院化・法主権威化を進めていく上での方法・やり方であります。これもまた貴方様に對して「釈迦に説法」だと承知の上で申し上げますが、覚如上人の時代には今だ関東における親鸞聖人の直弟、有力な孫弟子が存命である以上、大谷廟堂を寺院化し、法主として権威ある地位につくということは、関東と京都との力関係の問題もあり、容易にできることではなかったようですね。そこで関東にいる門弟方も含めて、親鸞聖人にご縁のあった方々を、巧妙に説得するために構築した論理こそが、「三代伝持の血脈」という、覚如上人独自の血脈の論理（実際は血統の論理ですが）だと言われております。『口伝抄』の冒頭には、

「本願寺鸞聖人如信上人に對ししましておりおりの御物語の条々」

という表現が見えますので、この書物が親鸞聖人から孫

の如信上人に口伝されたことに基づいて作られたことを述べておられます。また『改邪抄』の末尾にも、

「祖師本願寺聖人親鸞面授口決 先師大綱如信法師之正旨、報土得生之最要也。余壯年之往日、忝從受三代黒谷・本願寺・大綱伝持之血脈、以降鎮蕃二尊興説之目足也。」

とあります。これらは、法然上人以来の浄土念仏の教えが、その正統な弟子親鸞聖人を経て、その孫如信上人に伝持され、今ここに覚如上人に継承されたとして、覚如上人の立場の正当性を主張するための論理であることは、どうも臆眉目にみても明らかであります。覚如上人の著述では、親鸞聖人という人物がいかに優れており、法然門下でも比類なき高弟であったかを述べる文が何度も出てきます。有名な所では、『御伝抄』巻上第六段における信行両座の記伝において、明らかに法然の教えを正しく理解し継承する者として、聖覚や信空と共に親鸞聖人を位置づけていることがわかります。この信行両座の記伝につきましては、法然上人自身があれだけ念仏を勧励していたにもかかわらず、信不退の座に座って往生の因として念仏行を否定したかのような態度はとても容認できないとして、後世の学者からは覚如上人による創作ではないかという説も出ておりますが、私も全くの同感

であります。

いづれにしましても、法然上人の教えを正しく理解したのが親鸞聖人であり、それを孫弟子の如信上人が継承し、覚如上人自身が正しく如信上人から聞き学んだという事で、日本における浄土教の流れが、法然・親鸞・如信を経て覚如上人へと伝わったことを以て、関東の門弟をはじめとして、他の浄土異流をも意識しながら、自らの立場が正当なることを主張しようとしたのではないのでしょうか。

そして覚如上人は、それまでの教えによる血脈の論理から、代々留守職をあずかる親鸞聖人の血縁・血筋の論理を強調されてゆきます。『御伝抄』の冒頭には、

「夫聖人の俗称は藤原氏天兒 屋根尊二十一世の苗裔  
大織冠 鎌子右大臣 の玄孫近衛大将右大臣従一位  
内膳公六代の後胤弼宰相有国卿五代の孫、皇太后宮  
大進有範の子也……」

という記述があります。これは、貴族や支配階級とは決別したはずの親鸞聖人のことを、敢えて元貴族出身であることを書き記し公言したものと見えましょうか。何故に聖人が貴族出身であることを強調せねばならなかったのでしょうか。さらに詮索するならば、聖人が元貴族であることを強調し、覚如上人自らがその血統を汲む者

であるということの人々に伝えることによって、覚如上人自身は何を言いたかったのでしょうか。

その上覚如上人は、この血統・血縁の論理を展開させ、法主を善知識とみなし、それは「如来の代官」であるまで権威つけてゆきます。

「願力不思議の仏智を授くる善知識の実語を領解せず  
んば往生不可なり」 (「改邪抄」)

「生身の如来にもあひかはらず。木像ものをいはず。

經典口なければ伝へきかしむるところの恩徳を耳に  
たくはへん行者は、謝徳のおもひをもつぱらにして、  
如来の代官と仰いであがむべきにてこそあれ」(「改邪抄」)

このような血統や血筋を権威化させる考え方が果たして親鸞聖人に見られるのでしょうか。

これ以上上げる必要もないと思いますが、こうして考えてきますと、覚如上人にとっては、この「三代伝持の血脈」という流れこそが、浄土真宗を一本として独立させ、本願寺を寺院化していく上での、覚如上人独自の「血統によるところの一流」であると結論づけてもよいのではないのでしょうか。

## 二、信心正因・称名報恩

そしてその際に特に覚如上人が力説されましたのが、親鸞聖人の教義を「信心正因」(信心こそが浄土往生の正しき因)「称名報恩」(称名行は往生決定に対する報恩行)という、独特な解釈でもって押さえられたことでありましょう。それを継承された貴方様なら当然の事ながら知っておられることだろうと思います。

ところで鑑みますと、親鸞聖人がその思想において、「信心」を重視されたこと、そのことは覚如上人や貴方様がおっしゃられるまでもなく、浄土教の歴史においては特筆すべき事であろうと思います。

「涅槃の真因はただ信心を以てす」 (信文類)

「正定の因は唯信心なり」 (行文類)

などの文からもわかりますように、親鸞聖人は往生成仏の真因・正因として、「信心」を重視しておられました。それは親鸞聖人にとってはあくまで念仏する、その主体の心のあり方、内面にこそ焦点が当てられていたのであって、単なる口先だけの念仏を勧めていたわけではないことからわかります。その点浄土宗などにみられます、称名念仏の回数に重きを置くような教義や、念仏を諸行と同列にみなすような考え方とは明らか

かに異なるものでありません。

しかし一方で親鸞聖人には、信心と同様に称名念仏そのものが、往生の因であるかのような表現をされていることは御存知ないでしょうか。

「安養浄土の往生の正因は念仏を本とす」

(尊号真像銘文)

「正定の業因はすなわちこれ仏名をとなふる也」

(尊号真像銘文)

「夫れ濁世の道俗、速やかに圓修至徳の真門に入りて、難思往生を願うべし」

(化身土文類)

「定散自力の称名は 果逐のちかいに帰してこそ おしへざれども自然に 真如の門に転入する」

(浄土和讃)

「弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜんひとはみな ねてもさめてもへだてなく 南無阿弥陀仏をとなふべし」

(正像末和讃)

等々の文はご承知のことと思います。称名念仏を反復することの中で、その念仏が自然に十八願の弘願の念仏に転入するということ、すなわち念仏する者の心構えが自ずと真実の心になってゆくというのであります。さらに申し上げますならば、長い自力修行の中で、親鸞聖人自身が体験した念仏の反復こそが、実は真実信心に至るた

めの過程であったと深く知られてくる、そういうものとして念仏行があることを、ここでは体験的に表現しているとしても申せましょうか。貴方様はこのことについて如何解釈なさいますでしょうか。

ところがですね、このような親鸞聖人の、体験的でもあり難解な信心・念仏の理解について、覚如上人は敢えて浄土異流と決別する為でありましょうか、信心のみが正因であり、称名は報恩行に限定するかのような「信心正因、称名報恩」という独自の数字を構築されました。まず一念の義については

「一念も多念も、ともに往生のための正因たるやうところえみだす条、すこぶる経釈に違せるものか。：：しかるに世の人つねにおもへらく、上尽一行の多念も宗の本意とおもひて、それにはかなはざらん機のすてがてらの一念とこころうるか。これすでに弥陀の本願に違し、積尊の金言にそむけり。そのゆへは如来の大悲短命の根機を本としたまへり。もし多念をもて本願とせば、いのち一刹那につづまる無常迅速の機、いかでか本願に乗ずべきや。されば真宗の肝要、一念往生をもて淵源とす」(『口伝抄』)

と示され、一念往生の義こそが「真宗の肝要」であると理解されます。その上で称名の意義については、

「一念無上の仏智をもて凡夫往生の極促とし、一形憶念の名願をもて、仏恩報尽の経営とすべし」

(『口伝抄』)

「信心歡喜乃至一念のとき、即得往生の義治定ののち  
は称名は仏恩報謝のためなり」 (『最要抄』)

と述べられ、称名行が「仏恩報尽」「仏恩報謝」の行として限定して理解されます。このような信心、念仏の理解は、先述の『御伝抄』に見られる信行両座の記伝におきましても、往生の因が行の座すなわち称名念仏ではなく、信の座である信心こそがそれであることを親鸞聖人が選び、それを法然上人までもが容認したとするところにも見いだすことができます。これは先述の如く、法然上人の正統な後継者として親鸞聖人の偉才を伝えんがために書かれたものとも推察できましようが、往生の因としてあくまで信心を強調しようとする意図、信心正因(称名報恩)の教学こそを法然上人から親鸞聖人へと正しく継承されたものとして、民衆にわかりやすく教えるようとしたものとして考えることもできましよう。さらに『口伝抄』第十六条「信のうえの称名の事」という段におきましても、称名が報恩行であることを意識的に創作して記しておられることが窺えます。この親鸞聖人の御弟子、高田の覚信房が亡くなる際の出来事につき

ましては、『未燈抄』に見ることができませんが、貴方様はご覧になられましたでしょうか。

「そもそも覚信房の事、ことにあはれにおぼへ、またたふとくもおぼへ候。……おはりのとき、南無阿弥陀仏、南無無碍光如来、南無不可思議光如来ととなえられて、てをくみてしづかにおわられて候しなり。」

これは、弟子覚信房が師である親鸞聖人に面会しようとして関東から病症の身であるにもかかわらず上落されるのですが、途中で病状が悪化しいよいよ臨終に至るときに、「南無阿弥陀仏、南無無碍光如来、南無不可思議光如来」と称えて亡くなっていったという話であります。つまり臨終に際して、弟子が念仏を称えて亡くなっていった状況を詳細に記しているのでありますが、これが覚如上人の『口伝抄』になりますと、いささか趣を変えて記述されていることは御存知でしょうか。

「親鸞御弟子に高田の覚信房といふ人ありき。重病をうけて御坊中にして獲麟にのそむるとき、聖人入御ありて、危急の体を御覽せらるるところに、呼吸のいきあらくして、すてにたえなむとするに、称名をこたらずひまなし。そのとき聖人たつねおほせられてのたまはく、そのくるしけさに念仏強盛の条まつ神



妙たり。たゞし所存不審いかんと。覚信房こたへまふされてはく、よろこひすてにちかつけり。存せん事一瞬にせまる。刹那のあひたたりといふとも、いきのかよはむほとは往生の大益をえたる仏恩を報謝せずむはあるへからすと存するについて、かくのこたく報謝のために称名つかまつるものなりと云々。このとき上人年来常随給仕のあひたの提、そのしるしありけりと、御感のあまり随喜の御落涙千行万行なり」

とあります。このことについて覚如上人自らが「真宗の肝要、安心の要須これにあるものか」と領解され、最後に「称名は仏恩報謝の他力催促の大行たるへき条、文にありて顕然也」と結ばれて、いよいよ称名念仏が報恩行であることを示そうとされるのです。このように『口伝抄』では、親鸞聖人が亡くなる弟子覚信房に対して、称名する際の信心がどうかというのを問いただし、念仏を称えたという行為以上にその内実を問題にし、称名を報恩行に限定するように巧みに書き換えられているのです。もし両方の文章をお読みならば、その矛盾について貴方様は如何お考えになられるでしょうか。さて、こうして考えてきますと、「信心正因、称名報恩」という教義を導こうとする為に、恣意的にその逸話を創作される覚如上人の巧妙な手腕には脱帽させられるばか

りであります。覚如上人のように、信心が正因であると共に、称名が報恩であるとの表現は、親鸞聖人の著述にも何カ所か見えますが、それを浄土異流や真宗の他派と区別するかの様に報恩行にのみ限定するといった考え方は、親鸞聖人には見られません。むしろ報仏恩の実践として称名念仏もあり、利他行や他者教化という社会的な行為もあつたと考えるべきでありましょう。また信心が正因であり、その後の念仏が報恩であるといった時間的な前後で信心と念仏を分ける発想も、親鸞聖人の躍動的な信心・念仏の思想を充分理解し得ていないところからくる誤解とでも申せましょうか。むしろ「信心正因、称名報恩」という固定的・限定的な教義こそは、覚如上人独特の信心・念仏の理解であると言ってもおかしくないと思います。

### 三、「御文章」に見える覚如教学

さてここまで申し上げてきましたが、ようやく蓮如上人貴方様にも、私の真意がおわかりいただけるのではないかと思います。先に挙げさせていただきました「聖人一流章」を再び思い出して下さい。

ここでは明らかに「信心をもて本とせられそうろう」と、

信心をその肝要とする「信心正因」の義を述べておられることは申すまでもありませんね。そして最後に書かれている表現が「そのうえの称名念仏は、如来わが往生をさだめたまいし、御恩報尽の念仏とこころうべきなり」とありますから、ここにはっきりと「称名報恩」の考え方を見いだすことができます。このような信心が正因であり、称名が報恩であるといった論理構成の、簡潔でわかりやすい文章はそうそうお目にかかれるものではありませんので、さぞかし一般民衆にも、貴方様が理解される親鸞聖人の教えが伝わったことだろうと思います。

しかし蓮如上人様、貴方が宗祖親鸞聖人の思想を学び、それを広め伝えていく中で、その理解の仕方に誤りはないかたでしょうか。知らず知らずのうちに、覚如上人という眼鏡を通して思想や生涯を理解されなかったでしょうか。私としてはそのことが残念に思えて仕方がないのです。何故そんなことを申すのかとおっしゃられそうですが、貴方様のお手紙の冒頭に戻っていただければ一目瞭然、おわかりになるだろうと思います。そこには「聖人一流の御勸化のおもむきは信心をもって本とせられせうろう」と書いておられます。「信心正因、称名報恩」という覚如上人の思想をここまで簡潔に表現している以上、貴方様のお考えが覚如上人の思想とは無関係である

とはおっしゃらないでいただきたいのです。

「一流」ということにつきましても同様です。貴方様には「本願寺作法之次第」の中で、「御一門の腕とて昔より腕各別聊も下輩の人にもつかはれざる腕御入候事にて候」云々という件において、貴方様一門の使っておられる腕を興正寺の蓮生が使ってご飯を食べたところ、貴方様はたいそうご立腹なさって、その腕を竹で粉々にこわし、今後そういうことが一切あってはならないとお叱りなられたという事実があったとお聞きしております。

「平座にて」という同朋精神が貴方様の教化態度として挙げられておりますが、にもかかわらずここには貴方様の非常に血縁・血統へのこだわりが垣間見えるところでもあります。そういう事実が、覚如上人のお考えと全く同じであるとは言えないにしましても、血縁による法主の権威付けという点では、覚如上人の発想と相通じるものがあることは否定できないでしょう。少なくとも親鸞聖人には見られない考え方であります。

このように、親鸞聖人との違い、覚如上人との共通点から推測しますと、ここでの「聖人」とは、また「一流」とは何を指しておられるのかは、申すまでもないことかもしれません。余計なお世話かも知れませんが、「聖人」とは「上人」の誤りではないのでしょうか、それも他の

法主ではなく明らかに「覚如上人」だと言ってもよいかもしれません。そして「一流」とはその覚如上人が構築された「三代伝持の血脈」のことではないのでしょうか。貴方様のお手紙では、表面上は「親鸞聖人のお伝えしたかったことは」という意味にとれないこともありませんが、「聖人一流」と敢えて書かれるところは、正に覚如上人に影響を受けられて、他の浄土異流や真宗の他派を意識して書かれているとしか考えられません。であるなら、ここは「覚如上人三代伝持の血脈のご勸化のおもむきは」と理解することこそ、正しい解釈と言わねばならないはずで。

こうして考えてきますと、冒頭にも述べましたように、蓮如上人、貴方様が一生懸命に人々にお伝えした真宗の教えとは、決して親鸞聖人の教えやその人格に基づくものではなく、覚如上人の理解された範囲での教えであったことがはっきりとしてくるのではないのでしょうか。どうしてこのように親鸞聖人と覚如上人の違いを明らかにし、蓮如上人、貴方様の教えが親鸞聖人ではなく、覚如上人のものを継承していると敢えて言わなければならぬのでしょうか。それは私自身の立場にもよりますが、少なくとも覚如上人や貴方様の教学においては、往相あって還相なし、つまり現世への立ち返り、現実を批判

するような実践性が見いだせないのであります。その実践性において、弾圧や世俗の権力に対してあれだけ厳しい態度をとられた親鸞聖人の実践性と、王法や五常倫理を丸々受け入れてしまうような覚如上人や貴方様の実践性は明らかに質の異なるものと言えましょう。そしてその実践性の裏付けとして信心や念仏の理解、血統・血縁へのこだわりがあると考えることは決して誤りではないと思います。

先日『統蓮如への誤解』という本を読みました。その中で川本義昭氏が以下のように記しておられたことがとても印象的であります。

「比喩的にいうならば、蓮如と親鸞を、一つの階段の最上階に親鸞、その一段下に蓮如、というふうにして理解したらそれはまったくの妄見であるということだ。親鸞という階段があり、蓮如という階段があるのだ。ぼくたち教団人は、あたりまえの話、親鸞という階段を共有しているということなのである。どのように、どこまで上れるかは、それぞれの問題だ。けれど蓮如という階段の最上階に自若するよりは、親鸞という階段を上ろうと悪戦苦闘するほうが思想的に豊饒な生を与えられ、親鸞的〈眞実〉にもかかなうのである。ぼくたちには上ろうとすることしかできない

い。しかし上ろうとすることならば、誰にでもできるのである。」（『続蓮如への誤解』一一七頁）

確かにその通りだと思えます。一足飛びに宗祖親鸞聖人の生き方に学ぶことは難しいから、またはその教えが難解だから、とりあえず蓮如上人でも……。蓮如聖人の思想を契機としてその延長線上に親鸞聖人の教えがあるのでは……。こうした考えを持たれている方が結構多いのです。でも蓮如上人、貴方様ももうわかっておられるのです。親鸞聖人という階段と蓮如上人という階段は、階段そのものが違っていたのです、違う階段だったので。私たちが蓮如上人の階段をどう上がってみても、親鸞聖人には出会えない。その先にはせいぜい覚如上人しかおられないでしょう。しかし、一步でも親鸞聖人に学び、その生き様や思想を主体化し実践してゆくならば、そこには自ずと上ろうとする階段が違ふことに気付かされるのであります。

ここでは「聖人一流章」に少し触れて、「聖人一流」ということ、「信心正因・称名報恩」について若干考察を加えたままで、貴方様の教学形成に覚如上人の教学が大きく関与していることがわかっただけでも、親鸞聖人という階段と、蓮如上人・貴方様の階段は違うのだという確信が持てたような気にもなっております。その

他にも弾正親を含めた王法仏法の問題、往生理解の問題、真宗と神祇の問題、女人や悪人の救済観、等々についても触れたく思いましたが、それらについてはまた機会がありましたら、宗祖親鸞聖人とは異なるところを明確にさせていただき、お手紙を出せたらとも思っております。

## 追伸

今年が貴方様が亡くなられて五百年という年月が経っております関係から、各地で「蓮如上人五百回大遠忌法要」なるものが計画され、実際に厳修されております。

それも単なる法要ではなく、「奉讃」や「讃迎」という名称がつけられ、内容的にも私の友人と同じく親鸞聖人と貴方様を同列に並べ、現在の本願寺教団の興隆、貴方様のご功績を讃えて、それを正当化するという内容のものであります。しかしながら貴方様のご苦勞はご苦勞として認めたとしても、それは覚如上人の教学や本願寺教団正当化の問題であって、宗祖親鸞聖人の思想とは決して相容れるものではないでしょう。むしろ貴方様の法要を通じて、根本的に貴方様の階段と親鸞聖人の階段が違ふということ、益々親鸞聖人とかけ離れた本願寺教団の負的な側面を明らかにし、そういう歴史から私たちが学んでゆくということが大切だと思われませんが如何で

しょう。

「化土往生」をされていたはずの貴方様も五百年という年月が経っておりますから、もうそろそろ真実報土に往生され、親鸞聖人にもお会いできていることだと思いません。貴方様の念仏や信心理解について一度親鸞聖人とじっくり話し合われては如何でしょうか……。いや失礼しました、親鸞聖人は還相回向で衆生教化されておられるのに、貴方様は往相回向のみを強調され常住の極楽の方が良いとおっしゃっておられましたね。それならなおさら出会うことはやっぱりむずかしいでしょうか……。上ったものの、やっぱり階段が違ったということでしょうか??.....合掌

